

琉球大学学術リポジトリ

幼児教育と小学校教育の接続を重視したスタートカリキュラムの探究
—スタートカリキュラムに基づく生活科授業実践を通して—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2022-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下地, 昌代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017953

幼児教育と小学校教育の接続を重視したスタートカリキュラムの探究

—スタートカリキュラムに基づく生活科授業実践を通して—

下地 昌代

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・西原町立西原東小学校

1. はじめに

『小学校学習指導要領』（文部科学省 2008a：73）の生活科の「指導計画作成と内容の取扱い」では、「国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること」や幼小接続に関して相互に留意する旨が示された。また、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議（2010）は、幼児期の教育の目標と児童期の教育の目標を「学びの基礎力の育成」という一つのつながりとして捉えるとしている。

また、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 生活編』の改定の主旨（文部科学省 2018a：5-6）では、「幼児期の教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラムについて、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とすること。スタートカリキュラムの具体的な姿を明らかにするとともに、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等との関連についてもカリキュラム・マネジメントの視点から検討し、学校全体で取り組むスタートカリキュラムとする必要がある」と指摘されている。さらに改定の要点として、「生活科においては、言葉と体験を重視した前回の改訂の上に、幼児期の教育とのつながりや小学校低学年における各教科等における学習との関係性、中学年以降の学習とのつながりも踏まえ、具体的な活動や体験を通して育成する資質・能力（特に「思考力、判断力、表現力等」）が具体的になるよう見直すこととした。」とあり、教科目標の中でも「生活科が教育課程において、幼児期の教育と小学校教育とを円滑に接続するという機能をもつことを明示」することが求められた。

筆者のこれまでの実践を振り返ってみると、多種多様でそれぞれ特色のある幼児保育・教育施設（13～19施設）で保育や幼児教育を経た、環境や経験知に違いのある児童を受け入れて一緒に学校生活をスタートし学習を共にしていくことの難しさを感じ、まずクラスの規律を揃え、それに適応させることに重きを置きすぎていたとの反省がある。個人差に応じた個別支援として、家庭と連携し個別の育ちに応じた支援を行ってきたが、その過程に時間がかかった。また、スタートカリキュラムの工夫・改善にも時間配分や内容に課題が存在している。更に、保幼小連絡会を立ち上げ共通理解と連携構築を目指したが、双方間の理解が深まっているとは言えないのが現状であった。そして、幼児教育での経験や発達の理解、これまでの育ちを踏まえた支援や指導・授業づくりの工夫にも課題があった。

筆者がこの間実際に教育をつかさどってきた児童の様子から、児童が実際に受けてきた就学前教育では、自分で選択して体験的に時間をたっぷり使って活動できていたのが、小学校での45分という授業の区切りや10分間という短い業間休み、座学への我慢や学習規律を強いられるストレスも見受けられた。また、教科の枠に縛られ、興味・関心や活動のつながりが途切れる事やこれまで培ってきた「年長プライドの損失」による戸惑いも見られた。

以上のことから、幼児教育への理解も深め、総合的な学ぶ活動である遊びから、教科学習への移行による抵抗感を緩和する教科等横断的なカリキュラムを作成し、年長プライドを生かせるよう、就学前接続期カリキュラムであるアプローチカリキュラムを基に、育ちの連続性を意識したスタートカリキュラム作成が必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、幼児教育とのつながりを重視し、就学全教育と小学校のスムーズな接続を企図したスタートカリキュラムの改善を図ることである。具体的には、筆者の勤務校が所在する自治体の年長児の実態に基づいたスタートカリキュラムの作成と、それに基づく生活科による合科的学習を生かした指導の工夫であり、その実践を報告することでスタートカリキュラムの改善事例を示すことである。

3. 研究方法及び内容

- (1) A町保育所・保育園・幼稚園・認定こども園及び町内小学校1年担任への実態調査と分析
- (2) 実態調査と分析に基づいたアプローチカリキュラムとのつながりを意識したスタートカリキュラム作成
- (3) スタートカリキュラムを踏まえた授業実践及び接続を重視した検証（課題発見実習Ⅱ前期）
- (4) 実践を通じたスタートカリキュラムの改善

4. 研究の実際

(1) 幼小接続に関する動向

『小学校学習指導要領解説 生活編』（文部科学省 2008b）の「改訂の趣旨」では、「小1プロブレムなどの問題が生じる中、小学校低学年では、幼児教育の成果を踏まえ、体験を重視しつつ、小学校生活に適應すること、基本的な生活習慣等を育成すること、教科等の学習活動に円滑な接続を図ること、などが課題」であり、「幼児と児童の交流をはじめとした幼児教育との連携を、一層推進することが改めて重要である」と記され、幼小の接続の重要性の認識とその取り組みの推進が求められた。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）』（文部科学省 2018b: 112）の「指導計画の作成内容の取扱い」では、次のように示された。

他教科等との関連を図り、指導効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児教育の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通じた総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。

幼児教育との育ちの連続性を考慮した指導や円滑な接続の工夫、生活科を中心とした合科的・関連的な指導、弾力的な時間割の運用が求められている。そこで、課題発見実習Ⅱ（前期）では、生活科での遊びを通じた総合的な学びを生かした授業改善に取り組んだ。

(2) 課題発見実習Ⅱ（前期）から見た幼児教育との接続

9月に実施された課題発見実習Ⅱの受け入れ先であるB小学校の教育計画には、幼小中連携教育推進計画、幼小接続期カリキュラム、幼稚園アプローチカリキュラム、小学校スタートカリキュラムが明記されていた。秋田（2017）は、保幼小連携の課題について、「どのようにして相互にその意義や意味を共有して『見える化』し、子ども、保育者、教師、保護者の誰にとっても互恵的な交流連携が可能となるのかをさらに探求していくことが求められている。そこには管理職のリーダーシップの影響が大きく、皆で心通わせ、より良い育ちの場を保障していくことが問われている」と指摘した。この指摘の通り、小学校の教育計画に幼児教育との接続が明記されることで、教職員間で幼小接続の意義や実践の共有ができると考える。また、管理職のリーダーシップが発揮されており、幼稚園教諭と小学校教諭が気軽に

課題研究中間報告

行き来できる関係づくりの構築と、お互いの保育や授業を見合うことで理解が深まり、その後の話し合いでは新たな気付きや指導、支援のヒントを得ることにつながっていた。逆説的に言えば、幼児教育との接続の課題としては、保育者と小学校教師のどちらにも互恵性のある、円滑な接続を意識した話し合いの場の設定、幼児教育との育ちの接続を意識した指導、幼児と児童間の交流の計画的な実施が必要である。そこで、課題発見実習Ⅱ（前期）では、幼児教育での各領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」との学びのつながりを意識し、友達と協力して関わりながら没頭して活動できる学習場面を設定した。また、幼稚園時との教材のつながりの工夫や、主体的に学ぶ意欲につなげるために、学習のめあてや約束を児童に考えさせることで、思いや気付きをワークシートや発表で生き生き表現する姿が見られた。

(3) 授業実践：(連携協力校 B 小学校第 1 学年 生活科 単元名「おもちゃづくり」 6 時間)

①授業事前・事後アンケート

授業をした 2 クラスを対象に、児童の生活科の学習についての学習観と、幼児教育から小学校への接続で楽しいと思っている事や困っている事・不安要因についての授業前後における変容を調査した。

表 1 授業事前・事後アンケートの集計結果

内容	回答 調査日：(事前) 9月7日：回答人数47名 (事後) 9月17日：回答人数47名
1, 生活科の勉強は好きですか。 (授業前) (授業後)	とても好き83% まあまあ好き17% あまり好きでない0% とても好き85% まあまあ好き15% あまり好きでない0%
2, どうしてそう思いますか。 (授業前) (授業後)	・学校探検が楽しかった51% ・あさがおを育てたり観察するのが楽しかった35% ・楽しく勉強できた 6% ・わからないことがわかった 2% ・タブレットが楽しかった2% ・絵で表すことが楽しかった2% ・その他2% ・おもちゃづくり58% ・学校探検31% ・あさがお育て13%
3, 1学期の生活科学習で楽しかった事	・学校探検58% ・あさがお育て40% ・英語2%
4, なぜ楽しかったですか。	・学校探検でいろいろな所に行けた59% ・あさがおの種がたくさんとれた32% ・あさがおの観察や記録(色ぬり)が楽しかった9%
5, 小学校で楽しいことはどんなことですか。	・プールでの学習42% ・国語や算数の学習32% ・体育学習19% ・生活の学習7%
6, 小学校で困っていること・不安に思っていること (思っていたこと)	・友達ができるか 19% ・先生の話が分かるか・勉強がわかるか 13% ・給食を残さず食べられるか 13% ・トイレに行けるか 4% ・忘れ物をしないか 4% ・保育園・幼稚園の友達がいるか 4% ・1人で不安 4% ・登校する時に緊張する 4% ・困っている事や不安は特にない 35%

幼児教育と親和性のある生活科の学習について、授業の前後とも全ての児童が「好き・まあまあ好き」と肯定的な回答をしている。小学校で楽しい事としては 32%が「国語や算数の学習」を挙げているが、13%が「勉強がわかるか不安だ」と回答している。更に「国語や算数の学習」が「楽しい」と回答した児童の 57%が「勉強がわかるか不安だ」と回答した。つまり約 3 割の児童が小学校の教科学習への憧れと関心・意欲をもって挑戦したいという思いがうかがえる反面、その半数が学習への不安や難しさも感じていた。また、楽しい事としては 58%が活動的・体験的な「プールでの学習」「体育学習」「休み時間の遊び」「生活科学習」を挙げていることから、幼児教育からのスムーズな接続へつなげるには、算数や国語の学習と活動的・体験的な学習を組み合わせ、合科的・教科等横断的なカリキュラム作成や授業づくりを展開することが必要だといえる。

②児童ワークシートからの考察

単元「おもちゃづくり」のワークシートから C 児の気付きの変容と、幼児教育との育ちのつながりを以下にまとめた。

表2 C児ワークシートからの様子・変容と幼児教育とのつながり

時間	C児のワークシートからの様子・変容	幼児教育とのつながり (幼稚園教育要領(文部科学省 2018c)の第2章より)
第1・2時	第1時でいろいろなおもちゃ遊びを通して動く仕組みに興味を持ち、どのように動かさ考えながら遊んでいた。第2時ワークシートでは「大きい動きで飛ばすとすぐ飛んだ。」	<健康>内容(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。 <環境>内容(2) 生活の中で、様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。 <表現>内容(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
第3時	作りたいおもちゃに「わっか飛行機」を選び設計図を描き、工夫することとして、「ストローの真ん中にわっかを付けると飛ばないから、端っこに付けた。」と記した。	<言葉>内容(2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことを自分なりに言葉で表現する。 <表現>内容(7) かいいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどとする。
第4・5時	「わっか飛行機」の制作希望者は一人であったが、集中して創意工夫し、5種類を試行錯誤して作成していた。	<環境>内容(8) 身近な物や道具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。 <人間関係>内容(4) いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。
第6時	「大きいわっかを後ろにしたらく飛んだ。投げる時は、わっかをまっすぐにしたらく飛んだ。」「わっか飛行機の曲がるところがおもしろかった。」	<表現>内容(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 <言葉>内容(8) いろいろな体験を通してイメージや言葉を豊かにする。

C児は、集中して「わっか飛行機」作りに挑戦し、試行錯誤を通じた数多くの気づきを基に思考と表現を重ねた。C児のような姿を学習活動の中で引き出だせるスタートカリキュラムが求められる。また、幼児教育での育ちやアプローチカリキュラムとのつながりに配慮したスタートカリキュラムの作成と、幼児教育で体得した学びを土台に、育ちの連続性を意識した指導を行う必要がある。更に、幼稚園教諭との授業参観を通じた話し合いでは、筆者が小学校では当たり前だと認識していた事柄との相違(例えば、授業時間の区切り後も意欲が継続できる)に気づき、C児の幼児期からの育ちの把握(幼稚園時には友達との活動が多かったが、今回の授業では一人で最後までやり遂げていた)と共有(幼稚園時に、紙飛行機に興味を持って制作していたことが、今回のわっか飛行機を工夫して作る活動につながったと考える)を図ることができた。幼稚園教諭との連携は、児童理解や支援の工夫・授業改善に有効である。それらの気づきを基に、幼児期からの学びのつながりを大切にしたいスタートカリキュラムを作成する。

5. 今後の研究について

A町の就学前教育施設の実態調査と分析を行い、年長児の実態を把握し、その実態を考慮したスタートカリキュラムを今年度末までに作成する。実態を反映させ、幼児期との円滑な接続を企図したスタートカリキュラムに基づいた生活科の授業実践を行い、検討し、実践を通じたスタートカリキュラムの改善事例を示したい。

引用文献

- 秋田喜代美, 2017, 『0歳～6歳子ども社会性の発達と保育の本』株式会社学研プラス.
 文部科学省, 2008a, 『小学校学習指導要領(平成20年3月告示)』東京書籍.
 文部科学省, 2008b, 『小学校学習指導要領(平成20年告示)解説 生活編』日本文教出版.
 文部科学省, 2018a, 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活編』東洋館出版社.
 文部科学省, 2018b, 『小学校学習指導要領(平成29年告示)』東洋館出版社.
 文部科学省, 2018c, 『幼稚園教育要領(平成29年告示)』東山書房.
 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議, 2010, 『幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)』.